

週刊日米

家庭號 第一卷第九號

教育講話

周囲の幸福

人は自分だけが幸福であればそれでよいが、決して、決して、自分の周囲を幸福にしなければならぬ。周囲がより幸福になると、自分もより幸福になる。同時に、周囲が不幸になれば、自分が不幸に陥つてくるのである。

大昔の昔、人々が互いに助け合ひ、互に幸福を齎した時と違つて、今日では、互に幸福を齎すやうになつてゐる。その結果、周囲の幸福が増え、自分の幸福も増すことになる。家庭の幸福も、周囲の幸福も、互に幸福を齎すやうになつてゐる。その結果、周囲の幸福が増え、自分の幸福も増すことになる。

家庭の平和は夫婦相互の同情心

互心の権利主張は争論の基

我が家の平和は、夫婦相互の同情心による。互心の権利主張は争論の基となる。夫婦相互の同情心は、家庭の平和を保つための鍵である。互心の権利主張は、争論の基となる。夫婦相互の同情心は、家庭の平和を保つための鍵である。

小せ、合の相違は他人の幸福と関係がある。互心の権利主張は争論の基となる。夫婦相互の同情心は、家庭の平和を保つための鍵である。

育兒の葉

牛乳の飲ませ方 (三)

粉乳(ドライミルク)

牛乳の飲ませ方は、育兒の重要なポイントである。粉乳(ドライミルク)の飲ませ方について、詳しく説明する。牛乳の飲ませ方は、育兒の重要なポイントである。粉乳(ドライミルク)の飲ませ方について、詳しく説明する。

愛兒のこいつ

病後我儘の兒

病後我儘の兒は、親を悩ませることが多い。こいつの行動について、詳しく説明する。病後我儘の兒は、親を悩ませることが多い。こいつの行動について、詳しく説明する。

夫婦相互の同情心は、家庭の平和を保つための鍵である。互心の権利主張は争論の基となる。夫婦相互の同情心は、家庭の平和を保つための鍵である。

牛乳の飲ませ方は、育兒の重要なポイントである。粉乳(ドライミルク)の飲ませ方について、詳しく説明する。牛乳の飲ませ方は、育兒の重要なポイントである。

病後我儘の兒は、親を悩ませることが多い。こいつの行動について、詳しく説明する。病後我儘の兒は、親を悩ませることが多い。



家庭の儀禮

家庭の儀禮の事に就いて... 家庭の儀禮の事に就いて...

米國の行儀禮法



カービング

カービング... 食卓上の切役術... 「カービング」即ち客の前で主人が...

料理法六種

料理法六種... スタイルで教えるコンビーフの料理法六種を御紹介いたします。

天ふらわ

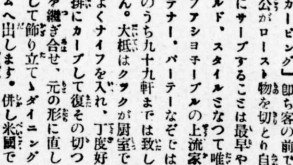
天ふらわ... おいしく作る方法... 天ふらわの汁の調製...

家事相談

家事相談... 結婚した青年... 神川千鶴子様へ...

素人應急手當

素人應急手當... 喉が腫れた時... 胸がやける時...



併發草体投入花

併發草体投入花... 併發草(アサギ)と花... 併發草(アサギ)と花...

洋食和食

洋食和食... 洋食と和食の相性... 洋食と和食の相性...

天ふらわ

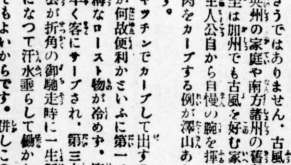
天ふらわ... おいしく作る方法... 天ふらわの汁の調製...

家事相談

家事相談... 結婚した青年... 神川千鶴子様へ...

素人應急手當

素人應急手當... 喉が腫れた時... 胸がやける時...



ターキー切り方

ターキー切り方... ターキーの切り方... ターキーの切り方...

料理法六種

料理法六種... スタイルで教えるコンビーフの料理法六種を御紹介いたします。

天ふらわ

天ふらわ... おいしく作る方法... 天ふらわの汁の調製...

家事相談

家事相談... 結婚した青年... 神川千鶴子様へ...

素人應急手當

素人應急手當... 喉が腫れた時... 胸がやける時...



一家庭笑話

一家庭笑話... 犬好き... 犬好きの婦人の飼犬が狂犬病にか...

犬好き

犬好き... 犬好きの婦人の飼犬が狂犬病にか...

人間より偉い

人間より偉い... 先生一人が他の動物より偉い...

新しい着物

新しい着物... 成女同じ芝居に二度も行くの...

あついで

あついで... 母「富美子さん、お母さん、こ...



妹の智恵

妹の智恵... 姉「これは誰の子よ、この一つ...

お母さん

お母さん... 姉「お母さん、お母さん、お母...

お母さん

お母さん... 姉「お母さん、お母さん、お母...

お母さん

お母さん... 姉「お母さん、お母さん、お母...

お母さん

お母さん... 姉「お母さん、お母さん、お母...

子供相談

子供の智能助長の 玩具の選び方 (四)

科学型子供の玩具
科学型玩具は、子供の興味を引くように、長じた型、色、音、匂い、味、触り、動き、など、あらゆる面で、子供の興味を引くように考へて作られる。また、子供の発達段階に合った玩具を選ぶべきである。それには、子供の年齢、性別、個性、興味、などを考慮する必要がある。科学的な玩具は、子供の好奇心を刺激し、想像力を養い、創造力を伸ばすのに役立つ。また、科学的な玩具は、子供の学習意欲を高め、自己学習を促す効果がある。科学的な玩具を選ぶ際には、安全性、耐久性、教育性、などを考慮する必要がある。

衛生問答

問 子供の皮膚が赤いのは何故ですか？
答 子供の皮膚が赤いのは、皮膚が乾燥しているか、日光に長時間さらされているか、またはアレルギー反応によるものである。皮膚を保湿し、日光を避けることで改善される。また、アレルギー反応の場合は、医師の指導に従って治療を受ける必要がある。

年増の化粧

問 私は年増になり、化粧をしようと思うのですが、どうしたらいいですか？
答 年増の化粧は、肌の状態や好みによって異なります。まずは肌の状態を良く保つことが大切です。化粧水、乳液、クリームなど、肌の保湿をしっかりと行いましょう。また、化粧品の選び方も大切です。肌に優しい成分の化粧品を選び、肌に負担をかけないようにしましょう。

フケと洗髪

問 フケがひどく、洗髪しても治りません。どうしたらいいですか？
答 フケは頭皮の乾燥や皮脂の過剰分泌によるものです。洗髪の際は、頭皮を優しく洗い、髪を乾かす際にはタオルで優しく拭き取り、ドライヤーの熱風を避けてください。また、頭皮を保湿し、頭皮の健康を維持することが大切です。

知識の泉

問 知識の泉について教えてください。
答 知識の泉は、知識を蓄積し、それを活用するためのツールです。インターネット、図書館、博物館、など、さまざまな場面で知識を学ぶことができます。また、知識の泉は、知識を共有し、学びを深めるための場でもあります。

電話口

問 電話口で話すと、声がこもる感じがします。どうしたらいいですか？
答 電話口で話すと、声がこもる感じがするのは、電話機のマイクが汚れているか、または話している場所が狭いからかもしれません。電話機のマイクを清潔に保ち、話している場所を広く保つことで改善される可能性があります。

美容相談



問 肌のシミを消す方法を知りたいです。
答 シミを消すには、紫外線を避けることが大切です。また、美白成分の化粧品を使用することで改善される可能性があります。ただし、シミが深い場合は、医師の指導による治療を受ける必要があるかもしれません。

親切の報

問 親切の報について教えてください。
答 親切の報は、親戚や友人からの近況報告や、家族の出来事に関する情報です。親切の報は、家族の絆を深め、互いに支え合えるための大切なツールです。

親切の報

問 親切の報を上手に伝える方法を知りたいです。
答 親切の報を上手に伝えるには、簡潔に事実を伝え、必要に応じて感情を込めて伝えることが大切です。また、相手の反応を見ながら、適切な返答をすることが重要です。

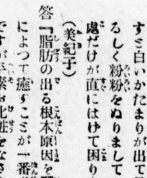
電話口

問 電話口で話すと、声がこもる感じがします。どうしたらいいですか？
答 電話口で話すと、声がこもる感じがするのは、電話機のマイクが汚れているか、または話している場所が狭いからかもしれません。電話機のマイクを清潔に保ち、話している場所を広く保つことで改善される可能性があります。

知識の泉

問 知識の泉について教えてください。
答 知識の泉は、知識を蓄積し、それを活用するためのツールです。インターネット、図書館、博物館、など、さまざまな場面で知識を学ぶことができます。また、知識の泉は、知識を共有し、学びを深めるための場でもあります。

親切の報



問 肌のシミを消す方法を知りたいです。
答 シミを消すには、紫外線を避けることが大切です。また、美白成分の化粧品を使用することで改善される可能性があります。ただし、シミが深い場合は、医師の指導による治療を受ける必要があるかもしれません。

親切の報

問 親切の報について教えてください。
答 親切の報は、親戚や友人からの近況報告や、家族の出来事に関する情報です。親切の報は、家族の絆を深め、互いに支え合えるための大切なツールです。

親切の報

問 親切の報を上手に伝える方法を知りたいです。
答 親切の報を上手に伝えるには、簡潔に事実を伝え、必要に応じて感情を込めて伝えることが大切です。また、相手の反応を見ながら、適切な返答をすることが重要です。

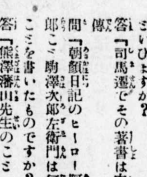
電話口

問 電話口で話すと、声がこもる感じがします。どうしたらいいですか？
答 電話口で話すと、声がこもる感じがするのは、電話機のマイクが汚れているか、または話している場所が狭いからかもしれません。電話機のマイクを清潔に保ち、話している場所を広く保つことで改善される可能性があります。

知識の泉

問 知識の泉について教えてください。
答 知識の泉は、知識を蓄積し、それを活用するためのツールです。インターネット、図書館、博物館、など、さまざまな場面で知識を学ぶことができます。また、知識の泉は、知識を共有し、学びを深めるための場でもあります。

親切の報



問 肌のシミを消す方法を知りたいです。
答 シミを消すには、紫外線を避けることが大切です。また、美白成分の化粧品を使用することで改善される可能性があります。ただし、シミが深い場合は、医師の指導による治療を受ける必要があるかもしれません。

親切の報

問 親切の報について教えてください。
答 親切の報は、親戚や友人からの近況報告や、家族の出来事に関する情報です。親切の報は、家族の絆を深め、互いに支え合えるための大切なツールです。

親切の報

問 親切の報を上手に伝える方法を知りたいです。
答 親切の報を上手に伝えるには、簡潔に事実を伝え、必要に応じて感情を込めて伝えることが大切です。また、相手の反応を見ながら、適切な返答をすることが重要です。

電話口

問 電話口で話すと、声がこもる感じがします。どうしたらいいですか？
答 電話口で話すと、声がこもる感じがするのは、電話機のマイクが汚れているか、または話している場所が狭いからかもしれません。電話機のマイクを清潔に保ち、話している場所を広く保つことで改善される可能性があります。

知識の泉

問 知識の泉について教えてください。
答 知識の泉は、知識を蓄積し、それを活用するためのツールです。インターネット、図書館、博物館、など、さまざまな場面で知識を学ぶことができます。また、知識の泉は、知識を共有し、学びを深めるための場でもあります。

A組 "Class A"

読み方 READING

三郎の母は四五日前から風をひいておられます。三郎はしんばいして、ひまをくれば、母のそばへ来て

「まだなほりませんか。苦しいことはございませんか。」

三郎「おかあさん、そのたくすりにはかうございませうか。苦ければ、私がかかりにのんであげませう。」

母「いいわ、たくすりはじぶんでのまなければ、何にもなりません。」

三郎「そんなに少じつじつで、早くなほりませう。」

母「もう一つにのんで、かへつておるのです。たいしやまのおしやまのほりのまなげればなりませう。」

今すぐに、おんをよ、行きたした、早く、母、いじものほり、した、何を言ひつて、ら、わ、女の子、おんをよ、は、

復習 (たのび) Review

和訳 Translation Into Japanese

字引 Dictionary

三郎 name of a boy 母 mother 四五日 four or five days 風を引いて with a cold

B組 "Class B"

読み方 READING

地球の表面の凡そ三分の二は海にして、三分の一は陸なり。北極、南極に近き地方には、半年は雪にして、半年は夜なる所あり。かゝる地方には氣候つねに寒冷にして、美しい花水を見ること能はず。ある土人の如きは氷を以て、家を造りて住めり

又世界の中には、年中夏の氣候にして甚だ暑く、少しも氷雪を知らざる國あり。かゝる地方には人は皆はだかにして、布片を身體の一部にまゝに過ぎず。

地球上に住む人類は總數十六億ありて、其の人類はさまざまなり。ヨーロッパ人は、大むね皮膚白く、髪赤く、眼の色青し。アフリカ人は皮膚黒く、髪ちりたり。日本人は髪も黒く、眼も黒く、皮膚の色は黄なり

復習 (たのび) Review

虎、耳、此の外、毛色、一様、尾、他種、足の先、力強し、獸類、相似たる、速び去る

地球の表面の三分の二は海にして、三分の一は陸なり。北極、南極に近き地方には、半年は雪にして、半年は夜なる所あり。かゝる地方には氣候つねに寒冷にして、美しい花水を見ること能はず。ある土人の如きは氷を以て、家を造りて住めり

又世界の中には、年中夏の氣候にして甚だ暑く、少しも氷雪を知らざる國あり。かゝる地方には人は皆はだかにして、布片を身體の一部にまゝに過ぎず。

復習 (たのび) Review

和訳 Translation Into Japanese

字引 Dictionary

地球の表面 the surface of the earth 凡そ in general 三分の二 two thirds 海 sea 陸 land 陸なり (陸地を) 北極 the north pole 南極 the south pole 近き near 地方 district 二は (二は) 首大し。

読み方 READING

半年 half-year 晝夜 day and night 夜なる (夜である) 所、かゝる地方 those districts 氣候 climate 常に always 寒く cold 寒くして (寒くして) 美しい beautiful 花水 flowers and trees 見ること能はず (見られない) 土人 a native 土人の如きは (土人などは) 氷を以て (氷を) 家を造りて (造りて) 住めり (住んで) 又 and 世界の中 in the world 年中 all the year long 暑く hot 少し not a bit 氷 ice and snow 知らざる (知らない) 國 country 皆は (皆は) 布片 piece of cloth 身體 body 一部 one part 毛を以て (毛を以て) 地球上 on the earth 住む to live in 人類 human race 總數 whole number 十六億 1,600,000,000 ありて (ありて) 各種 various 各種各様 various

黒く black 髪 frizzy 日本人 Japanese 黄 yellow

復習 (たのび) Review

地球の表面 the surface of the earth 凡そ in general 三分の二 two thirds 海 sea 陸 land 陸なり (陸地を) 北極 the north pole 南極 the south pole 近き near 地方 district 二は (二は) 首大し。

地球の表面の三分の二は海にして、三分の一は陸なり。北極、南極に近き地方には、半年は雪にして、半年は夜なる所あり。かゝる地方には氣候つねに寒冷にして、美しい花水を見ること能はず。ある土人の如きは氷を以て、家を造りて住めり

又世界の中には、年中夏の氣候にして甚だ暑く、少しも氷雪を知らざる國あり。かゝる地方には人は皆はだかにして、布片を身體の一部にまゝに過ぎず。

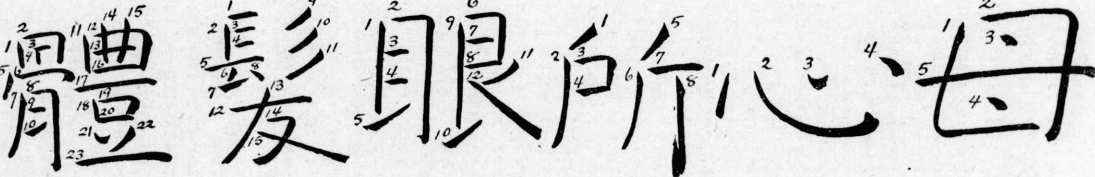
地球上に住む人類は總數十六億ありて、其の人類はさまざまなり。ヨーロッパ人は、大むね皮膚白く、髪赤く、眼の色青し。アフリカ人は皮膚黒く、髪ちりたり。日本人は髪も黒く、眼も黒く、皮膚の色は黄なり

復習 (たのび) Review

和訳 Translation Into Japanese

字引 Dictionary

地球の表面 the surface of the earth 凡そ in general 三分の二 two thirds 海 sea 陸 land 陸なり (陸地を) 北極 the north pole 南極 the south pole 近き near 地方 district 二は (二は) 首大し。



組 "Class C"

読み方 READING

心育の體育

身心の兩全を理想として、その訓育に務むる

これらは天然の性のまゝを醇化して、圓滿完

アテ子人の心を重んぜしこと、また、きは

理想とせし故、自然の結果として、常識を尙

復習 Review

須臾。養成。觀念。國家的。好例。改良。保護。日國語。

偉大。美德。國民。教育者。肉體上の標識。

字 引 Dictionary

身心(からだ)の(心) 兩全 both to be perfect

理想 ideal 訓育 education 務むる to endeavor

歐州 Europe 文明 civilization 源泉 source

古代希臘 (ancient Greece) アテ子 Athens

優るはなし none is superior to

天然の natural 性のまゝ as disposition is

醇化し to refine; to idealize 圓滿 complete

作らんと欲したり (せんと欲し) 敬に (そなたに)

敬へ (あなたに) 強健 robustness

強健ならざるべからず (強健でな

ければならぬ) 働 work

敏捷 smart 風采 appearance

莊重 dignified 優美 graceful attitude

人に對して (人に向つて) 暢然 (たのしみ) だれ(であれ)

重んじて (重んじて) 重んじて (重んじて)

重んじて (重んじて) 重んじて (重んじて)

重んじて (重んじて) 重んじて (重んじて)

重んじて (重んじて) 重んじて (重んじて)

重んじて (重んじて) 重んじて (重んじて)

重んじて (重んじて) 重んじて (重んじて)

重んじて (重んじて) 重んじて (重んじて)

重んじて (重んじて) 重んじて (重んじて)

重んじて (重んじて) 重んじて (重んじて)

重んじて (重んじて) 重んじて (重んじて)

重んじて (重んじて) 重んじて (重んじて)

重んじて (重んじて) 重んじて (重んじて)

道徳の神效 the ideal perfection of virtue

國風 (national customs) 必しも not necessarily

善く (good) highest beauty

天性に準う to be subject to the natural disposition

完備 perfect virtue 達せんと努めし (達しようとは

ねをこめた) 學びて (studied)

習ふべきにあらずや (習ふべきで

はないか) 作文 Composition

次の言葉を用ひて短かい文を作

つて下さい 一、欲したり

二、ならざるべからず

三、重んじて

四、自然の結果として

五、必しも

六、習ふべきにあらずや

日本歴史 History of Japan

西の 役 The Samsa Rebellion

明治維新の後 隣國 (neighbour-

ing country) の朝鮮 (Korea) に使

を遣つて交際を求めましたところ

が、その朝鮮では排外思想 (an-

ti foreign spirit) が盛んであつた

ので、大層無禮な態度 (attitude)

をしました。陸軍大将の西郷隆盛

などは朝鮮征伐 (the Korean ex-

pedition) を主張 (insisted) 全

にも戦が始まらうとしました。丁

度この時に、露 (Russia) (Europe

and America) を見越して来た人

々が歸つて来て、戦争よりも内治

(domestic affairs) を第一にした

ければならぬ事を勧めたので朝鮮

征伐はやめになりました。

西郷隆盛等はこれに怒つて、故郷の

(native place) 鹿島に歸り、私

學校といふ學校を作つて、青年達

(young men) を教育 (educated) し

ました。その内に私學校の生徒た

ちは政府 (the government) の事

事が気に入らないので、遂に、西

郷隆盛を首 (leader) として兵を率

げました (raised an army)

朝鮮では、すぐに征討軍 (an ex-

peditionary force) を遣つて之を

攻めました。始めは隆盛の軍が中

々強てくまみせんでしたが、後

に官軍 (the government army) が

勝つて隆盛を始め軍人々々は皆戦

死 (died in battle) して死にました

りました。之を西の 役といひまし

て明治十年の事でありました。

隆盛は「たんだん (Tan-tan)」といふ汚

名 (a bad name) を受けました

人でしたから憲法發布 (the pro-

clamation of the constitution) の

時に罪を許して位 (rank) を與

へられた。

質問 Question

一、西郷隆盛は、なぜ故郷の鹿島

へ歸つたのでか

二、なぜ朝鮮を征伐しようとした

のですか

三、私學校はどこに出来ましたか

誰が作りましたか

四、西の 役は明治何年頃の事で

すか

言葉の遣ひ方

挨拶 Salutation

先生「今日は I am sorry

trouble you so much をやませ

伊藤「元と、せんねんです。

山田「To trouble you so muchは

山田「To trouble you が分りませ

先生「ごでは、ごめいわくをか

けてまして、として

山田「Fao muchは、

先生「大層で、よろしい

山田「ごめいわくをかけたして、

大層

先生「日本派の時は大層を先へ言

つて

山田「大層ごめいわくをかけたし

て

先生「始めから言つて下さい。川

村さん

川村「せんねんです、大層ごめい

わくをかけたして

先生「せんねん、を後につけて

川村「大層ごめいわくをかけたし

て、せんねんです

先生「せんねん、をもつと軽く言

つてごらんさい。田中さん

田中「軽くつてなんですか

先生「ごでは、せんねん、と言

ふより、もつと、やさしく言ふ

方がよろしい

田中「失禮しました、ですか

先生「それでも悪い事はありませ

んが、ごでは、せんねん、で

よいのです。始から言つて、田

中さん

田中「大層ごめいわくをかけたし

て、せんねん。

先生「その返事 not at all 伊藤さん

伊藤「ごしも無いです

先生「ごでは、少し變です。お

禮など言はれた時に何と言ひま

すか

伊藤「なんでも無いです

先生「ほかに、川村さん

川村「どうも………いたしました

山田「先生知つてゐます

先生「山田さん

山田「どう、いたし、まして

先生「Final、ごでは、それが一語

よろしい。みんな一緒に

みな「両方がいておいて下さい

大層ご迷惑を掛けてまして、すみ

ません

どういたしました

先生「せんねん、を後につけて

川村「大層ごめいわくをかけたし

て、せんねんです

先生「せんねん、をもつと軽く言

つてごらんさい。田中さん

田中「軽くつてなんですか

先生「ごでは、せんねん、と言

ふより、もつと、やさしく言ふ

方がよろしい

田中「失禮しました、ですか

先生「それでも悪い事はありませ

Around World in Small Plane



Gordon Selfridge, noted London department store owner bidding good-bye to his daughter, Violet, now the Viscountess Jacques De Sibour, who with her husband began a flight around the globe in a Moth airplane.

Forced Back By Motor Trouble



The Bellanca sesquiplane "Rome" taking off from Old Orchard, Me., on a projected trans-ocean flight to Italy. Twenty minutes after the hop-off, however, the fliers were forced to return. Inside the plane were Commander Cesare Sabelli, Pilot Roger Q. Williams, Pierre Bonelli and Dr. Leon Pisculli.

President a Real Peasant



An unusual picture of a national leader. M. I. Kalinin, popularly known as the President of Russia, although his official title is President of the Central Executive Committee of the U. S. S. R., shown with his wife and son on their farm near Moscow.

Honored Singer



Kathryn Meisle, Chicago Opera Company contralto who has been signed to appear at the State Opera in Berlin and Cologne.

Hankow Swept By Fire



A typical street scene in the crowded native quarter of Hankow, China, where fire destroyed 2,000 houses and shops and left 7,000 homeless.

A Little King and His Kin



A scene on the beach at Mamala. Left to right, Princess Theodora of Greece; King Michael of Roumania; his mother, Princess Helene; Princess Irene of Greece (Helene's sister); Princess Marguerite of Greece; Little Prince Philip of Greece and Prince Paul of Greece. Note the beach headresses worn by royalty.

Veteran Proud of His Curls



C. V. Boyer, 82, of Montana, was one of the most adorned delegates attending the G. A. R. gathering at Denver, Colo. A boy scout is presiding at the mess.

NEW BLOOD IN U. S. NET WORLD SEEN

Veterans Destined To Give Way To Rising Stars

By GEORGE KIRKSEY
United Press Sports Writer

THE old guard in American tennis is passing over the horizon. "Big Bill" Tilden and "Little Bill" Johnson have reached the end of the trail.

Francis T. Hunter, 34-year-old publisher, made an amazing comeback in the national singles championships, but he may never again reach the heights he scaled against Jean Borotra, George Lott and Henri Cochet. He beat Borotra and Lott, but lost to Cochet after a five-set struggle.

America's tennis future rests with the younger generation. If and when the Davis Cup comes back to the United States, the victorious team will be composed of some of the rising stars just now beginning to twinkle on the courts.

Outstanding Youngsters
The outstanding young players who bounded to the front ranks last season include:

John Van Ryan, East Orange, N. J., 23.
Frank X. Shields, New York, 18.
Wilbur F. Cohen, Jr., Kansas City, 17.

Gregory Mangin, Newark, N. J., 20.
Julius Seligson, New York, 19.
Berkeley Bell, Austin, Tex., 20.
Willmer Allison, Fort Worth, Tex., 24.

Those players together with Lott and John Hennessey, who won their spurs on this year's Davis Cup team, will form the nucleus of the 1929 squad.

No other nation has as promising a group of young players as the United States. France has two bright young stars in Rene de Buzestet and Christian Bossus. Cochet believes de Buzestet a tall, graceful youth will develop into one of the world's best players. He developed from no 20 in the French rankings in 1927 to one of the first six this year.

England has little Bunny Austin, the Cambridge University tennis captain who beat Lott, Hennessey and Cochet abroad, but no one else to go with him.

CRAWFORD PROMISING
Perhaps the foremost young player of all is Jack Crawford, the well-equipped Australian who extended Hunter in the national championships series at Chicago. Crawford has the strokes and physique to make a champion, but lacks the fighting temperament especially when he is in the lead. Australia also has another good young player in Harry Hopman.

Great things are expected of Shields, Coen and Mangin next season. Only 18, Shield has the best build of any of the young group. His remarkable triumph over Jacques, Brungnon and his ex-national championships labeled him a coming champion. He was erratic last season, but should settle down with another year's experience.

Coen and Mangin lack the physical qualities of Shield, but both promise to develop into top rank players. Long a protegee of Tilden, Coen is about ready to graduate into a really finished player. His forehand drive is already one of the best in tennis. Mangin's backhand and his fighting spirit are his chief assets.

Van Ryan is just a step away from young court strategist and net player. Bell and Allison lack ruggedness, but are improving. Seligson is handicapped by his short stature, but his game has a sound foundation.

The Coming Tennis Generation



DRINK MORE PURE WATER FOR HEALTH

Average Person Requires 8 Glasses Every Day

FEW people take too much water, and many drink not half enough.

Water to drink is a daily need for which there is no substitute. It maintains the volume of blood in the body by making good the constant loss of water through lungs, skin and kidneys. Water is necessary for the removal of the waste products which result from muscular and mental activity. Lack of water leads to thirst and faintness and, if long continued may cause fatigue, restlessness and general bodily discomfort. Such manifestations are promptly relieved by water.

Water is required in proportion to the weight of the body, and the need is augmented by a dry and salty diet, by active exercise, and by hot weather. The necessity for water is greatly increased by infections in mouth, nose and throat, by fevers, and by various other ailments.

To maintain vigorous health, an adult should drink, in every 24 hours, at least eight glasses of water of eight ounces each. For 16 waking hours this would be an average of one-half glass an hour.

Nature is kind to those who do not drink water, in supplying it in large percentage in fruits, vegetables and milk. When water in the body is abundant, part of the excess is stored in the large muscles of the back and thighs, and is returned to the circulation as the volume of the blood is gradually depleted.

It is worth while to establish a water-drinking habit. The hourly striking of a clock, or some regularly recurring event of the day, may be made the call to drink. Water in a pitcher, or in a thermos jug, sufficient for any chosen period of the day, may be made a constant reminder to take water.

Water may be taken at any agreeable temperature. Very cold drinks should be taken slowly, especially if one be overheated. Hot drinks should not be hotter than can be comfortably held in the mouth, for very hot fluids injure the lining of the stomach. A moderate amount of water at meal time does no harm.

IMPORTANCE OF SOUP

We are accustomed to think of soup as a winter dish—quite forgetting that many recipes nicely supplement the cold summer meal. Barely do we relish a dinner that is composed entirely of cold food, and even the least scientific dietitians recommend that menus have one hot dish.

When appetites are finicky it is a sign that there should be a change in the general diet for a day or so. An occasional dinner whose main dish is a satisfying soup, with perhaps a substantial dessert to follow, does wonders in the way of restoring a desire for hearty food.

THEN AND NOW



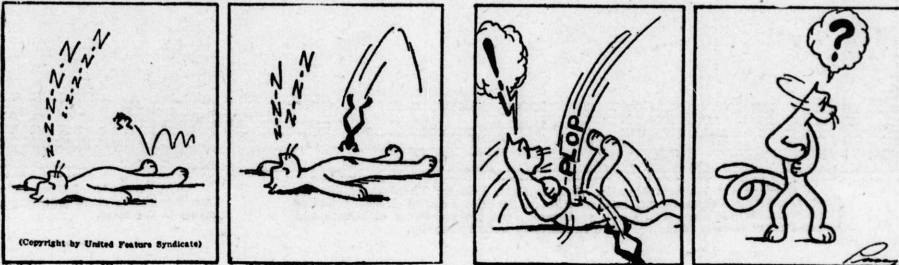
THIRTY YEARS AGO

Just returned from Aunt Matilda's with her applecake recipe for mamma—or rather for the minister who is very fond of it and is coming to tea. Little Janey put on her new Sunday dress to show me and lisped, "I can tharsley wait for Thurch Thursday." I tried to tell her it was very wicked to go to Church for that purpose, but I am afraid my short sermon did no good. But it is lovely—a dark red poplin.

TODAY

Goah! What a hectic afternoon looking after my brother's "enfant terrible," while her mother went shopping. She is being brought up in the modern fashion which I translate as doing exactly as he pleases. But she is a dear child even though she did spill my precious Black Narcissus and generally wreck the place. And she looked adorable in a little Jersey dress of two shades of blue that complimented her eyes. I must go to bed early as my deputy nurse duty I find much more tiring than dancing.

CAT TALES



By Pusey

ENJOY YOUR HOME LIFE BY
STUDYING THESE USEFUL
HINTS BY JUNE DUNHAM

GOOD THINGS FOR LITTLE FOLKS

WITH the first days of school and the return to regular habits come sharpened appetites and eager questions of "What's for dinner?" "What's for desert," from the little folks.

And there must be interesting answers on the tip of one's tongue if these childish hopes for "good things" are to be satisfied.

A number of suggestions that are particularly pleasing to the juvenile taste come to mind.

For one thing, there is a delicious alphabet soup whose foundation is of chicken broth. The macaroni ABC's will be there in great profusion, and there will be thin little carrot rings cut out with a thimble, polka dots of green pepper and tiny squares of pimiento to furnish the decorative touch and extra flavor.

A certain favorite rice recipe that is most nutritious and satisfying may be relied on to please the youngsters. It has the flavor of meat without its substance, and is made by first cooking the tops of a bunch of celery in beef or mutton stock, or in water to which bouillon cubes have been added. The rice should be boiled in a separate kettle and when done, added to the celery stock until the mixture is quite thick. Add a little tomato juice or part of the tomato, and cook slowly until the rice is permeated with the meat flavor.

A salad of apples en surprise is guaranteed to please. Use a rosy polished apple hollowed out for the basket to contain the salad mixture. Chop the apple meat, add to it a teaspoon of chopped maraschino cherries and one of finely ground nuts. Mix with a cream mayonnaise and serve in the apple basket, garnished with a whole cherry.

A blueberry batter pudding that is eagerly welcomed for dessert in homes where there are children may be made with two cups of blueberries (fresh or canned) a half cup of sugar, a teaspoon of ground cinnamon, a cup and a half of flour, a cup of sugar, an egg well beaten, three-fourths cup of milk.

Mix the blueberries, sugar and cinnamon and place in a shallow buttered baking dish. Sift the flour, salt, baking powder and sugar together. Add the egg and milk and beat thoroughly. Pour over the berries and bake in a moderate oven for twenty-five minutes. Serve warm with cream.

Another tempting recipe for dessert uses cocoanut and fresh fruit in the following manner:

Soak two tablespoons of lemon-flavored gelatin in a fourth cup of cold water for five minutes. Heat a pint of milk to the boiling point and add to it the yolks of two eggs well beaten and a third cup of sugar. Cook until slightly thickened and add the gelatin. Cook until the mixture begins to thicken, then fold in two thirds cup of shredded canned cocoanut, the stiffly beaten whites of the eggs and flavoring. Line a mould with the fruit — oranges, sliced peaches, pears, apricots, or any fruit in season — pour in the mixture and spread the remaining cocoanut on top. When thoroughly chilled the pudding is ready to serve.

These recipes are all simple and inexpensive selections that are in perpetual good standing with children who know them. Try them for the little folks at your house.

VISITING THE
WORLD CHILDREN

By Ruth Thompson



REED BOATS



PASTORAL SCENE

CHILDREN OF BOLIVIA

One day mother, father, Rubia and Romero took a trip. They went to Lake Titicaca, 50 miles away. That lake is the highest in the world on which there are steamboats! It is a big, big lake. The great steamships that sail there were made in Scotland. They were carried piece by piece up the Andes mountains. Then they were put together again. Indians live there, too. But they have boats of woven reeds, like baskets.

By traveling and using one's eyes much can be learned. So, Rubia and Romero learned that the products of Bolivia were sent out from there on Lake Titicaca down into Peru. And trains carry loads to and from the lake. And manufactured shoes, books and other things come into Bolivia over Lake Titicaca. Rubia and Romero were interested. "Some day," they said, "we will be workers for our Bolivia, too."

The ROMANCE of JAPAN

Through the Ages

By JAMES A. B. SCHERER

An Interpretative Outline of the Story of Japan from the Introduction of Buddhism in 552 A. D. to the Passage of the Manhood Suffrage Act in 1925.

(Continued from last week.)

This one-sided trade seems to have been largely responsible for that radical impoverishment which dates from the Tokugawa age and is still a source of some embarrassment of Japan. Japanese writers still denounce Deshima as a gate through which national wealth flowed away incessantly for two centuries and a half, while foreign economists agree that if the produce of placers and reefs had been kept at home until modern days, and then used to purchase spinning machinery, to start foundries, to establish dockyards and facilitate internal communications, Japan's industrial position would be even better than it is.

The Dutch were shut up at Deshima just ninety-nine years after the discovery of Japan by the Portuguese. A caustic Japanese writer sums up the results of this first century of foreign intercourse as "the adoption of gunpowder and firearms as weapons, the use of tobacco and the habit of smoking, the making of sponge-cake, the naturalization into the language of a few foreign words and the introduction of new and strange forms of disease."

11

Iyemitsu carried absolutism to an extreme degree in his treatment not only of aliens, but of his own fellow-countrymen as well, including the daimyos and even the Emperor. Shortly after his father's decease he summoned all the daimyos and said:

My grandfather owed much to your assistance when he brought the Empire under his sway, and my father, remembering these things, naturally treated you rather as guests than as vassals. But my case is different. I was born to the rule of the land. I cannot regard you in the same light as the Shogun did. If good order is to be preserved, my relation to you must be that of sovereign to subject. Should any among you find that relation irksome, and desire to reverse it, I am prepared to decide the issue on the battlefield. Return to your homes and think it over.

Thus addressed, the daimyos were struck with awe, as a native historian confesses:

None of them dared raise their eyes. For a while dead silence reigned in the hall, but presently Date Masamune spoke: "We all bathe in the favor of the Tokugawas. If any one here entertains a disloyal purpose, I, Masamune, will be the first to attack him." Then the other daimyos unanimously said: "We are of the same mind as Masamune." Thereupon Iyemitsu retired to a room and summoned the individual daimyos in turn. As each came into his presence, Iyemitsu handed him a sword, with the words: "Unsheathe it, and inspect the blade!" In this way every daimyo was called in, and there was none who was not awestruck and who did not perspire on his back. They all said to one another, "The work of the Tokugawas has assuredly been established by the Third Shogun!"

Being a connoisseur in tea, the Third Shogun had his favorite tea-leaves brought all the way to Yedo from Uji, near Kyoto; which would not be worth mentioning had he not organized the passage of his August tea-caddies into a sort of religious procession, requiring all who might meet this procession in the course of its three-hundred-mile journey along the great highway—including the highest nobles in the realm—to prostrate themselves before his tea-caddies a devout Catholics bow before the host.

While this haughty Iyemitsu reestablished the lapsed custom of doing official homage annually at the great ancestral shrines of the imperial family in the province of Ise, he no sooner did this than he demanded reciprocal treatment for his own house; requiring an imperial envoy to come up from Kyoto to Nikko on every anniversary of Iyemitsu's death and do homage at the new Tokugawa tomb, which he had decided should also be his own. He further assumed the title of Tai Kun ("tycoon"), or Great Prince, and it was retained by all his successors.

Iyemitsu himself had greatly diminished the Emperor's prerogatives, but Iyemitsu dared even to revoke imperial acts. One of his successors went so far as to punish, "for presumptuousness," envoys sent by the Emperor to Yedo to get his advice!

When all is said, however, it must be conceded that Iyemitsu's isolation of Japan was a policy of such importance, and indeed necessity, that it atoned for the many abuses of Tokugawa rule. Had it not been for this drastic policy, Japan would have gone the way of the Philippines—losing its national soul as well as its independence through the insidious encroachments of the predatory powers of the West. Japan shut her doors, barred them, padlocked them against disturbing and dangerous outside influences, and then achieved an integration of which she stood much in need, and without which she could not have preserved her individuality intact when the flood-gates were finally opened and Western influences poured in. As it turned out, Japan has the unique distinction, among all modern nations, of having reached the full limit of its individual development, and this development took place during the Tokugawa rule, in consequence of an arbitrarily imposed isolation. All the great nations of the past, as Walter Bagehot points out in his profound study of sociological principles, "Physics and Politics," were framed each by itself,—composed far away from all distraction. "The ages of isolation had their use, for they trained men for ages when they were not to be isolated."

12

The Tokugawa age was above all a long period of intensive character-training. Japan secluded herself as in a convent, abstained from internal dissensions, and went as it were to school. The influences of this era of concentrated schooling so wrought upon and developed certain inherent national tendencies as to produce five fundamental qualities of character—traits that account in large measure for the Japan of today. These qualities are bravery, loyalty, thoroughness, alertness, and self-control.

Bravery has long been the chief ideal of Japanese character. What beauty meant to the Greeks, and right to the Romans, and sanctity to the ancient Hebrews, bravery has meant to Japan. A man might be whatever else he pleased in old Japan, but if he was brave, he kept the respect of his fellows, and might even become a meibod. As we have already seen, the development of bravery was undertaken with deliberate thoroughness by the Tokugawa; martial exercises, including the suicide-drill, holding a commanding position in the curriculum of their system of schools. Suicide was sublimated into a virtue as the supreme test of bravery, as well as of obedience. Its elaboration into a national institution, practiced and beaudead for centuries, has doubtless done more than any other one thing to make the Japanese soldier so notably different to the perils and pains of war.

(To be continued.)

Julliettes



The muff is being seen again and mostly in medium sizes. This flat muff and scarf of caracal was seen in one of the exclusive shops.



The ensemble of bag and gloves of black suede and shark skin. The gloves and bag carry out the eyelet oxford motif of the eyelets in the shoe.